

空

平成26年4月20日発行

第12巻2号

通巻第54号

空



2014・4・5

SORA 54号

春霞

柴田佐知子

如月の光の芯として駿馬

耕して黒々と山富むごとし

裏山に獣のこゑや涅槃変

牛の子を取り巻いてゐる春の山

添ひですぐ共に雛の流さるる

辻守る神はつつまし沈丁花

石段の高さちぐはぐ春祭

赤ん坊が花筵より這ひ出せり
休日之父に子猫のとびかかる
文書くも昼餉をとるも春炬燵
花冷の一と間に僧と墨の香と
青々と匂ふ畳や仏生会
連山を仏界として春霞
百千鳥青空にこゑ収まらず
花種を蒔く縁側に母を置き
鍋磨きあげて春愁うすれたる
菜の花や貨車と客車の音違へ
つばくらめ表通りに出てまぶし

春風 高倉和子

大仏の前の土産屋日脚伸ぶ

対岸のものみな光り二月来る

卒業式終へたる髪を切りにけり

水底に日だまり揺るる雛祭

連山の高さに合はせ剪定す

泥吐かす鯉の太さや春祭

花屑の湿りて色のかたまれり

春風と夢のあはひを生きて母

初音 中田みなみ

海光の山より笑ひ始めたり

鶯の初音駅員いつもひとり

この先は行けぬ隧道浦島草

茶屋の裏急勾配や川原鷗

永き日の海へ出てゆく川の鳥

ベル押して君のこゑ待つ沈丁花

立話蜂一と廻りして戻り

盛り場を詠みて荷風の忌も近し

妬心 荒井千佐代

寒林 服部早苗

死ぬ力日々たくはへむ水雲食ふ

寒林のどの一樹なる香りよき

凍曇り落暉の日矢は天を射る

晴天と大地のあはひ麦を踏む

狐火を見むと浜石積み上げて

闊歩数七千五百ふきのたう

嬰に妬心生れてやつかい冬木の芽

湯気立てて眼鏡くもらすうつつかな

いまさらに父母の亡きこと梅真白

鋤焼や遅れ来しひと頬紅き

かたまるや海鼠もわれも孤独にて

影と影支ふる木立冬深む

涅槃雪沖より鏝の匂ひせり

僧帽筋ゆるみてゐたり蕪汁

春満月たれかれに死をそそのかす

豆打つや逢魔が刻を見極めて

日脚伸ぶ 柴田志津子

如月 だいにじみどり

参道を真直に来る冬將軍

霜折れの物干竿を肩に乗せ

よく動く兎の口や日脚伸ぶ

如月の脚をそろへて竹林

五指反らしもの言ふ少女花ミモザ

伸びあがりほほけちらせる露のたう

川幅を少しひろげて鴨帰る

探梅やお城のような家もある

老いてなほ漁網繕ふ雲雀東風

歩きつつ土筆をさがす目付きかな

配置変へして新社員迎へけり

三月や死後の始末を書き清書

門を出て手持無沙汰や春の風

北窓を開けば青い空がある

一人乗せバス折り返す山桜

雛の膳
野上
杏

城垣の上より声や梅の花

福寿草覗く人影重なれり

風花や時をり水に風の影

白波に囲まれ島の紅椿

切株のいびつな楢円冴返る

まつすぐに畝整へて土の春

光りつつ潮差す川や雛の膳

春潮のひたひたと安芸一の宮



福岡 矢野百合子

勝独楽の勝ちてさみしく廻りをり
全貌を見せずに消えし雪女
春めくや眉のやうなる防波堤
み仏にすべりすぎたる春障子
雛人形後ろの奈落知らぬまま

糸田 宮井知英

オーロラの大気圏へと鳥帰る
思ひ出のいつも真ん中ひな祭
アルバムのおかつぱ頭昭和の日
入院や遠回りして桜見て
弟に父の眼差し蝶の昼

千葉 原友子

国引きのごと雪折をひきずり来
狂ひなく薪割れにけり梅二月
ちちんぷいぷい種薯に灰まぶす
神鈴の緒のうつとりと鳥の恋
引鶴へ光り惜しまぬ水面かな

福岡 栗原京子

探鳥の空見るばかり冬苺
宝船乗れるものなら乗つてみる
髪切つて正月の来るはやさかな
太刀魚の曲げて売らるる海遠く
葉は要るか否か問ひたる大根かな

吉井 高倉 恵美子

並んでもどうにもならぬ寒さかな

昼食に大きな苺誕生日

梅の花夫待つ家に帰りたし

退院もままにならざるチューリップ

妹にしばらく会はず朧かな

福岡 山内 碧

探梅へさそふ日和と思ふのみ

染みひとつ無き白菜を剥ぎゆきぬ

一族のかたまり行き交ふ三が日

川上に遊ぶ番の残り鴨

内気なる子の頭に載せしげんげの輪

兵庫 戸栗 末廣

落日の海へととろりと寒造

さざめける樟に北窓開きけり

たんぽぽの野にサーカスの杭五本

ねんごろな医師に貰ひし春の風邪

男ごころは戻りやすし山桜

長崎 鳳 蛮華

寒山の人栖むところ薄けむり

南より冬日責めくる盆の窪

神主と巫女の逢ひ引き笹子鳴く

風呂敷に包むべくあり春光り

はみ出せる南部煎餅のどけしや

福岡 樋口みのぶ

神々は奥に祀られ冬木の芽
初夢の愛の告白聞きとれず
眼差しの似たる仏や春を待つ
囃されて子の踊り出す雛の前
すかんぽや村の鳥居は小さくて

大阪 田岡千章

初空を仰ぐ三百六十度
初空へ干され赤子のもの多し
嫁が君走りて闇の新しき
七種や家風といふは夫の味
列なして黙や寒九のプラットホーム

糸島 小林朱夏

土筆野に玄海の風母の声
人形を引き摺りまはす仔猫かな
晴れの日も長靴が好きしやぼん玉
香の物囃む音確か夏兆す
田植済み明日の結納待つばかり

熊本 松田明子

抛られて唸り始めし喧嘩独楽
寒明のしづかな雨となりにけり
佛跡の指の先まであたたかし
舟宿の屋号大きく春障子
離れ住む姉妹の月日桃の花

東京 古川 夏子

ここよりは柳生街道冬蔵
寒林や地軸いつ日か反転す
冬櫛近藤勇の大き口
半間の戸口や京の蕪蒸
糸紡ぐ祖母の座に春来りけり

福岡 あさなが捷

雪解けの音とどろかせ流れ来る
ひなげしや錆にまみれて馬具飾
万葉のこひは直截しやぼん玉
終はらぬと思ひし頃の桜かな
天上へ昇る棚田や夏の蝶

粕屋 吉田 菫

満天星の花尊敬は恋に似て
あたたかや太極拳は這ふごとく
墓出でて区画整理に遭ひにけり
校門に走り込んだる桜かな
隧道の向かうは昔もんしろ蝶

粕屋 秋 千 晴

シーサーの守る島民鳥帰る
春なれや両手で掬ふ沢の水
うづくまる水牛に草萌えはじめ
星砂を両手で掬ふ春夕べ
潮の引く珊瑚の島や春の月

第3回「空新人賞」受賞

栗原 京子



花の昼不動明王のみ怒る

田水張る生けるものみな鼓動して

走り根の上へ下へと蛇逃ぐる

あぢさゐの初めに色はなかりけり

ソーダ水人魚の帰る海の色

金魚鉢岩置き蓬莱山となす

白蟻の穴ごと重要文化財

なめくぢの好むものみなぬめりゆく

本堂に香水幽か夕勤行

道ふさぐ祭囃子についてゆく

英雄は解体されて山笠果てぬ

殉死してあの世も武士のまま夏日

翡翠の青は後に捧げけり

夕立が底まで乱す鯉の池

諍ひて家飛び出せば道をしへ

神童は素数好みり日の盛

肘高く真珠を外す夜の秋

猫老いて喋り出しさうなる月夜

満月やいつそ獣になりて野へ

名を付けて絞められぬ鶏赤のまま

神々はざんばら髪や里神楽

熱病のやうな足どり里神楽

元朝や去年と同じ顔洗ふ

猪が人の数越え島しづか

ひとつぶの米は宝と寒雀

ロツカーをもとの広さに卒業す

九相図の果ては青空草青む

山笑ふ恵比寿はいつも釣支度

眺め良き場所は断崖花とべら

茫洋と某月某日春は行く

第3回「空新人賞」受賞

戸栗 末廣



種祭り遠嶺はうすき雲放つ

日向ぼこ遠まなざしは待つごとし

父のゐて離島のごとし春炬燵

ものの香の顔の高さに三月来

あめんぼう一蹴りごとに考ふる

咲くやうにひとかたまりの梅雨茸

白粥に朝顔の紺咲き揃ふ

雨粒のはじめはまばら曼珠沙華

山巔のかげりてきたる晩稻刈

どの汽車も鉄路に眠り天の川

竹馬に太平洋のひろがれり

篋へ音の移りし初霰

大仏殿雪解雫をほしいまま

一月の竹やぶに入る用のあり

囀や母の前掛けいつも濡れ

一点に止まる凧のつまらなき

蛇出でて風上に舌使ひをり

水中花海へ向けたるとき開く

盤石の貌とこゑなり牛蛙

近景も遠景も山昼寝寛

たましひを招く手揃へ踊りけり

あをあをと海荒れてゐる唐辛子

白波の沖に砕ける椿の実

秋冷や駿馬はいつも前を向き

月明やたつぷりと振る育毛剤

妻の用とうに忘れて菜虫とる

いつさいは秋夕焼の中にあり

やすやすと齡を加へ初秋刀魚

すかんぽや見えゐる魚の糸垂らし

凭れゐる木にひぐらしの鳴きはじむ